

株式会社 今井産業

木製ダンボール『e・wood+』



フロントガラスを平川市役所の庁舎が近づいてきた。前を走る車の運転席から、(株)今井産業の今井公文会長が窓を開けて、指差したのは、その右隣で現在建設中の新庁舎であった。2023年に開庁するこの新庁舎に、木製ダンボール『e・wood+』で作る椅子やテーブルなどの備品が採用されることになった。元のリンゴの剪定枝や老木、間伐材などを活用した新素材『e・wood+』が開発されてから11年。昨年、平川市ふるさとセンターに『e・wood+』製の椅子が設置されたのに続き、今度は市のシンボルである市役所で日の目を浴びることになる。

平川市役所新庁舎の備品に『e・wood+』ホールの椅子やテーブルや行事案内の看板も

『e・wood+』の生みの親は今井公文会長だ(開発当時は今井産業社長)。2012年に東京ビックサイトで開催された『産業交流展2012』で、青森県発の新素材・水に濡れても破れない「木」のダンボールとしてデビューした。リンゴの木や間伐材だけでなく、今井産業

れといえる。

それともう一つのニュースは、『e・wood+』の「3D」が開発されたことだ。今井会長からの電話でそれを知ったが、「3D」と聞いても、どのような立体なのか、うまくイメージできなかった。

今井会長の説明によると――「長方形の紙を丸めると煙突みたいな筒になりますね。その筒の真ん中を、外側に膨らみを持たせたものです。形は、丸い花瓶に似ています。平板の『e・wood+』を、アールの形状をした専用器具にはめ込み、水に浸けると、膨らんだ形のまま固定するのです。地方独立行政法人・青森県産業技術センターと共同で開発しました。膨らんだものと、へこんだ形もできます。3Dにしたことで照明器具などさまざまな製品への応用範囲が広がりました」

「3D」の現物を拝見しに(株)バンパーテック工業(弘前市清水森)へ向かった。広大な敷地に山



2年がかりで開発された『e・wood+』3D製作の専用器具



水に浸けてアール状に固められた照明器具のシェード部分



胴体が膨らんだ花瓶にそっくりな「e・wood+」3D。木で作ったとは思えない“ふくよかさ”がある

積み上げられている丸太の量が、1年前よりは心なしか少ないように見えた。ウッドショックの波がここにも及んでいるようだ。広葉樹の丸太の皮を剥いで、ロータリーにかけ、かつら剥きにして単板を製造する工場は、東北ではランバーテック工業1社しかない。県内外や海外からも丸太が運び込まれている。

ここで製造される単板が買われていく先は、県外の家具メーカーだ。単板を貼り合わせて机や椅子を作る。その机や椅子は、青森県内の学校では使われていない——という現状に目を向け、どうしたら地元に戻元されるようになるかを、去年の暮れに、今井会長と奥山悟社長による『県産材談義』（『青森県産材の家』No. XIIに掲載）で模索したのだった。

工場の一角へ、今井会長が案内してくれた。作業台の上に“木の花瓶”が置いてあった。そう見えた。なるほど花瓶にそっくり。胴体がふくよかに膨らん

だ、それが新開発の『e・wood+』3Dであった。平板の『e・wood+』を三次元化したものだ。メロンを割ったような形の専用器具にはめて水に7〜8分浸けておくと、膨らんだ薄板の表面がアール状に固まるのだそうだ。開発に2年かかったという。

あとで今井産業に寄つて、3Dで製作したという照明器具を拝見することにした。

*

ランバーテック工業の奥山社長が、「昨夜、こんなメールがきましたよ」とスマホの画面を見せてくれた。アメリカの商社の担当者からのようだった。注文を受けた丸太を期限までに輸送できるかどうか確約できない、という内容だった。

奥山社長の話 例の「ウッドショック」の影響ですよ。アメリカから丸太が入ってこないんです。新型コロナの感染対策で“家時間”を増やそうとアメリカ国内でリフォームの需要が高

まっつて木材が使われるようになったから、日本に回ってこないんです。木材を積み込むコンテナ不足もあいまつて、入ってこないし、価格が高騰するわけで、今たいへんなんですよ。まさに「ショック」です。

今井会長の話 輸入材が入らないので、その分国産材の需要が高まっています、住宅に使うスギやヒノキなど針葉樹を優先して伐るようになっていながら、今度は単板を作る広葉樹が不足している。それが日本の木材業界の現状ですね。

奥山社長の話 この状態もいずれば改善して、再び輸入材が入ってくるようになったとしても、いったん高まった国産材需要は、また戻ってしまうのではなく、根付くのではないでしょう。環境問題から国産の木を使おうと国が呼びかけ出したのは10年余り前ですが、その頃と今とを比べると大きく変わってきています。「木」を扱う仕事をしています、それは実感します

ね。個人が建てる住宅の木材はまだまだ外材が多いですが、大手の家具メーカーが、素材を国産材にこだわるようになったのは、10年前なら考えられなかったことです。あの当時は、材料はどここの国の木でもとにかく安けりや良かった。安さが最優先だった。それが今では、「地域」を優先ようになりました。

例えば、世界的なコーヒーチェーン店が、盛岡に店を出すことになったときに、店に備える椅子やテーブルは、単に既製品を取り寄せるのではなく、「地域の木」で作ることにこだわりました。担当の設計者が、地元の木を使うように指定したのです。その地域の山で育った木を伐り、地域の家具職人が作った椅子やテーブルを店に設置して、地域の人たちがコーヒーを飲んで憩う。そういう地域をテーマにしたストーリーを作るわけですね。そんな風にな大きく変わってきています。

今井会長の話 これすべて環



柔らかな光を放つ「e・wood+」3D製の照明器具。0.5mmの薄板を透ける光が自然の木目を照らし出す

境問題からですよ。海外ではなく、国内から木材を運ぶほうがCO2の排出量は抑えられる。2021年開催の東京オリンピックで、選手村ビレッジプラザの建設に全国各地から提供された木材を使ったことが、国産材需要を喚起する一大イベントだったのです。

立体化した3Dで照明 局面的な木肌を光が彩る

『e・wood+』3Dで製作したという照明器具を拝見しに、今井産業へ向かう途中で、

今井会長が車から建設中の新庁舎を指差したのだった。

平川市役所の新庁舎に『e・wood+』製の備品が採用されるまでに、今井会長が「木」のダンボールを考え始めた時点までさかのぼれば実に20年もかかっている。試作に着手し、歯車の形をした製造機械から薄板が波形を描いて押し出されてくるまでに3年。地元産の素材がビッグサイトでデビューし、平川市ふるさとセンターに椅子となつて「回帰」するまでに8年。今度は平川市役所へ。山

の木と同じに「育つ」までには時間がかかるのだ。

今井産業に併設する、住まいとくらしの提案情報機能館『虹いろの杜』の展示コーナーで、塗り壁を背に柔らかな明かりを灯しているのが『e・wood+』3D製の照明器具だった。

『e・wood+』は平板で、波形が6mm間隔で並列しているから、長手方向には丸められるけど、短手方向は曲げにくい。それを、曲げたままの局面にできないものか。2年がかりで3Dが完成しました」と今井会長。「厚さ0.5mmの薄い板の売りは、光が透ける自然の木目で、その魅力が最も発揮されるのが照明器具です。局面になった板を照らす光は、平板とはまた違う味わいがあります。照明にとどまらず、応用範囲はもっと広がりを見せていくでしょう」

『e・wood+』はまだまだ「進化の途中」にあるようだ。



美しい曲線を描く『e・wood+』製の椅子とオットマン(ショールームに展示)



自然のぬくもり暮らしの中に

株式会社 今井産業

本

社 ●平川市新館藤山16-1

TEL.0172-44-2145 FAX.0172-44-2568

<http://www.nijiironomori.net>

弘前常設展示場 ●弘前市泉野3丁目16-4

TEL.0172-55-0440 FAX.0172-55-0441

E-mail: llp-genki@clear.ocn.ne.jp

青森常設展示場 ●青森市富田4丁目12-22

TEL.017-752-0981

